



## 第42回「おかねの作文」コンクール

# 我が家のきまり

大阪府・和泉市立石尾中学校 3年 河野 愛香

我が家には、私の小さい頃から母がよく口にしていて言葉がある。「お金と健康と仲の良い家族。これが必要不可欠」この三つが最低限あれば、そしてその比重がうまく等分できていれば、毎日がスムーズに幸せに暮らしていける。これが私の母の持論だ。この作文を書くにあたり、久しぶりに母のこの言葉が頭の中によみがえった。そして、今まで素通りしていたが、初めて真剣にこのことを考えてみた。

まず最初に「お金」。これは生活していく上で、なくてはならないものだ。どこにも出かけず家にいるだけでも、私達はかなりお金を使っている。例えば、電気や食事、雑誌を読むこと。どれをとってみても、すべてお金がかかっている、もしくはお金で購入したものだ。何気ない一日の中でもお金を使っている。そのことに改めて気づくと、お金とは本当に絶大なものだと思う。

次に「健康」。これは私が中学1年生の時に、母が入院してしまったことが思い出される。母のかわりにしていた家事も大変だったが、何より自分自身がとても寂しかった。母の病気は特定疾患に指定されているため、医療費の助成制度が適用されるそうだ。つまり、現在の保険診療では、治療費の自己負担は3割相当だ。だが調査研究を進めている疾患のうち、原因究明、治療方法の開発等に困難をきたすおそれのある疾患を対象に、自己負担分の一部を、国と都道府県が公費負担として助成するというしくみだ。税金の一部がこうして母の病気を助成してくれている。母が助成される病気になってしまったのは大変悲しいが、こういう制度にとっても感謝したい。それとともに、税金が大変有意義な形で使われているということを知った。

そして最後に、仲の良い家族についてだが、この前、私の兄が言っていたことを思い出した。それは「俺の友達は、おばあちゃんの家に行くと、1万円もおこづかいをくれるらしい」ということだった。すると母は、「あのね、うちではおばあちゃんに言っているの、おこづかいでそんな大金を渡さないでって。その理由はね、純粋におばあちゃん達に会いに行くっていう気持

ちを大切にしてほしいから。」

と言っていた。確かに、小さい子供はまだお金の価値が分からない。そんなときから大金を渡してしまうと、子供はお金を欲しがらる。お金は恐ろしい面を持っていて、自分の正しい判断をくるわせてしまうこともあるのだ。もし私が小さい頃から大金を渡されていれば、おばあちゃんの所に行くとお金がもらえると間違った考えをおこしていたかもしれない。それはあまりにも悲しすぎると思う。私も兄も、おばあちゃんに会いたいから会いに行く、寂しがっているから会いに行く。それ以外思ったことがない。でも、おばあちゃんはおこづかいをくれる。確かにお菓子を買えばなくなってしまう金額だが、私はとてもうれしくありがたくもらう。でもそれはやはり、お金に関する考えがまひしていないからかもしれない。

このように考えてみると、お金はあらゆるものに間接的に<sup>かか</sup>関わってくる。だから私達はお金に左右されることなく確かな目を育てなければならないと思う。自分が働けるようになって、自分の力で得たお金を価値あるものにするのが、これからの私の課題と思う。人が買うから自分も買うのではなく、本当に自分に必要なものかどうかの目を育てる力、金額にかかわらず人に感謝する気持ち、そして、このことから我慢する力も必要になってくると思う。「人は仕事をするために生まれてくる。人の役に立つ仕事をして働いて喜んでもらって、そして自分はその報酬としてお金が入ってくる」と聞いたことがある。だから今度は、人のためになるように使うことができれば本当に生きて価値のあるお金になると思う。私はこれらを忘れず、お金を正しく使っていきたい。

